地域医療の重要性実感

草津で講座　医学生ら医師と交流

地域医療のやりがいと魅力を伝えようと県内診療所の医師が医学生を対象にした体験型講座を草津市内で開いた。参加した十二人の医学生は、診療所での体験発表や在宅医療に取り組む医師との親交を深め、患者の目線に立った医療の担い手として自覚を新たにした。医学生からは「大学では地域医療を深く知る機会が少ない」との意見もあり、医学教育の課題も浮かび上がった。（林勝）

懇親会で地域医療のやりがいや可能性について先輩医師（右端）の話を熱心に聴く医学生たち＝草津市のホテルで

「患者さんの生活支援も大切」

自治医科大（栃木県内）出身で、県内で地域医療に取り組む医師らが講座を開催。事前に県内の診療所で二日間の研修を終えた自治医科大と滋賀医科大の学生が参加した。

学生らは診療所の診察や患者宅の往診、福祉施設との保健事業の連携などの体験を報告。在宅医療を体験した学生は「（死期が近い人にとって）医療には限界があることを知った。患者さんらしい生活をできるだけ長く送ってもらう手助けも重要」「患者の家族の負担を減らすことも考えなければならない」と感想を述べた。

永源寺診療所（東近江市）の花戸貴司医師は、学生らに「病気と闘うことと、元気に生活することは同じだろうか」と問いかけ「患者さんの元気を大きくしたり、支えたりすることが地域医療の仕事」と強調。病気だけに注目するのではなく、患者を不安にさせる心理的、社会的な背景にも気を配り、地域の人々と協力して対処するよう諭した。閉会後、懇親会があり、学生は先輩医師の助言を熱心に聴いていた。

自治医科大五年の細野舞さんは講座を通して、地域医療の重要性と奥深さを実感。「患者さんが生きていることを本当に幸せに感じてもらえるような手助けができる医師を目指したい」と意気込んでいた。

医学生の診療所の研修は医学教育の一環で広く行われているが、今回のように実習報告や意見交換で現場医師との交流を深める活動は少ないという。講座の実行委員を務めた朽木診療所（高島市）の野村悠医師は「地域医療のやりがいを十分に伝えるため、このような機会を大事にしたい」と話していた。

つなごう医療

大学教育の課題も指摘

講座に参加した学生からは、大学の医学教育では地域医療の大切さを十分に学べないと、課題を指摘する声が上がった。

滋賀医科大四年の大竹要生さんは「地域医療に関心のある学生は多くいるのに、大学教育ではやりがいや魅力を知る機会が少ない」と話す。医師が住民の健康増進のために地域に出て活動することに魅力を感じており、地域医療に携わろうと現場医師との交流を大切にしている。

滋賀医科大家庭医療学講座の三ツ浪健一教授は教育のあり方について「地域医療の大切さは頭では分かっているが、

「魅力 知る機会少ない」

ているが、臓器別の専門的な指導が中心となっているのが現状」と明かす。地域で開業医になってもほとんどが専門診療で、地域医療を総合的に担う人材育成には課題が多いという。

卒業後の九年間、地域医療への従事を求める制度がある自治医科大出身の花戸医師は「地域医療を担う医師が不足しているが、自治医大出身者だけではとても解決できない」と指摘。他大学の医学生との交流を進め「志を共にする仲間を増やしたい」と語った。